日本学術振興会 ストックホルム研究連絡センター



1.センターの行事・関連イベント

GO ASIA シンポジウムについて

9月8日及び9日、カロリンスカ研究所のノーベルフォーラムにおいて、「Go Asia 2005 - 糖尿病シンポジウム」が、同研究所とアジア諸国の糖尿病の研究に焦点を当て、日本、マレーシア、ヴェトナム、インドから研究者を招聘して開催されました。

日本学術振興会は、日本・スウェーデン両国の学術 交流に資するため、日本人スピーカーの選定に協力、 所用の経費を支出するなど共催機関となり、当日はブ ースを設置して、シンポジウムの傍聴に訪れた学生に 対して、フェローシップの説明を実施しました。

喫煙や飲酒などの生活習慣と糖尿病発症との関係、

生活習慣改善効果などについて、発表された国立国際医療センター野田光彦部 長をはじめ各研究者の報告に対しては、他のスピーカーや学生から次々に質問



される光景が繰り返しみられ、本シンポジウムの目的である、カロリンスカ研究所のより多くの研究者や学生がアジアの研究所の現状につき理解を促進するとともに、研究の機会や交流を活発にするという所期の目的が達せられたと思います。また、普段しばしばキャンパスで見かける中国系はもちろん、スピーカーの「応援団」として、会場にはインド系の聴取が目立ち、この分野においても、今後の中国・インドの躍進を感じさせるものがありました。

野田光彦博士(国立国際医療センター部長) による講演の様子

なお、一日目のフォーラム終了後には、スピーカー等に対して、ノーベルフォーラムにある、ノーベル生理学・医学賞の受賞者を審議する部屋などカロリンスカ研究所のキャンパス案内が実施され、スピーカーからはノーベル生理学・医学賞の受賞者の評決方法についても質問がなされましたが、「こたえられない」とのことでした。

また、その夜、ヘンリクソン学長が、スピーカーたちと食事会をされ、King や Emperor の表現の差異など西洋と東洋の文化の違いなどについて話に花が咲 いたようです。(大月)





JSPSブースでは参加者にフェローシップの説明を行った

日本の学長団がスウェーデンを訪問

10月17日から22日にかけて、スウェ ーデン側の招待により、相澤東工大学長を団 長とする日本の17大学の学長、理事及び日 本学術振興会の小野理事長が訪瑞されました。 この学長団の訪瑞は、2003年10月に行 われたスウェーデンの大学長団の訪日の成果 を踏まえその交流を継続的なものにすること を目的として行われました。

日本の学長団は、大学長を始めとして資金 助成機関のトップや政府の政策担当者など研 スウェーデンの研究助成について説明する 究教育関係者と、大学の研究教育のあり方等 リサーチカウンシルの Omling 事務総長(上) について、トップマネジメントの視点からセ



ミナーなどを通じて議論を行うとともに、特に、イノベ ーションにつき活発に話し合われ、基礎研究及び応用研 究を組合せ、その結果を社会に還元がする必要があるな どの発表がなされました。

20日に行われた大学の視察では、学長団は、3グル ープに分かれ、ストックホルム以外にあるスウェーデン の代表的な研究教育大学である、ウプサラ大学、 ンド大学、 ヨーテボリ大学及びシャルマーシュ工科大 学をそれぞれ訪問して、生命科学、材料科学など最先端 の研究施設を視察しながら、産学連携、国立大学と私立 大学との連携方策など独自の取組みについて説明を受け るとともに、意見交換を行いました。

2 1日には、ウプサラで開催された欧州大学連合会議 にも参加し、大学の研究における戦略等をテーマに



Ångström Laboratory (Uppsala 大学)を見学する相澤団長 (東京工業大学学長)

議論するなど、スウェーデンのみならず欧州の大学関係者とも交流をもたれた後、ウプサラ大学にあるトウーンベリー標本室を訪問しました。

この標本室には、18世紀の後半に、スウェーデンから、南アフリカ、日本、東南アジア、南アジアを旅し、植物を集めたトウーンベリーのコレクションなどが、乾燥された状態で保存されておりました。

200年の時を超えて、日本の和紙に包まれ、見事に保存されていた日本の



トゥンベリーのコレクションを見て 歓談する訪問者(尾池京都大学総長 (左)と Sundquvist ウプサラ大学長 (右))

植物をみて、高名な学長たちも、その見事さに感 心し、その理由などを巡って活発に会話が交わさ れるなど今回の学長団の訪瑞を締めくくるのに相 応しいものでした。

学長団に随行しての感想ですが、スウェーデンの 高等教育機関は、それぞれの機関や地域の特色を 生かしながら、役割分担をして、国として研究教 育能力を高まることに留意をしているようで、今後 そのようなことも念頭に置きつつ、スウェーデンの

高等教育機関の調査等 を続けていきたいと考 えております。

また、今回の大学の視察では、ウプサラ大学において「ジェンダー」について少し話題が出た以外には特段、社会科学については話題に上らなかったようですが、今後、スウェーデンにおける自然科学及び社会科学との融合、社会科学研究などについても追っていければと考えております。(大月)



JSPS主催昼食会の様子

JSPS Alumni club in Sweden 第2回幹事会の開催

10月31日に、JSPS Alumni club in Sweden の幹事会が、8名の幹事が全員出席して、ストックホルム世界貿易センターにおいて行われました。

まず、4月の第1回幹事会以降の進捗状況として、会員が2名増えて幹事を含めて正会員が61名になったこと、本活動に関心のある人を準会員として募集を開始したこと、ニュースレターの発行状況について報告が行われました。その後、主として、次回の総会及びセミナーの議題、名誉会員の基準、JSPSフェローシップ事業への協力等について話合われたほか、Alumni club の活性

化のため、来年度以降会員が多いルンドやヨーテボリにおいて開催することが検討されました。

引き続いて行われた午後のセミナーは、 Alumni club の幹事も含め約40名が参加して 行われました。

岡崎所長が、挨拶及び当研究連絡センター の事業紹介をした後、長年日瑞の交流に携わってこられた瑞日基金のフリートウッド事務



総会の様子(岡崎所長挨拶)



三瓶恵子氏(JETRO)による 講演の様子

局長及びジェトロ・ストックホルム事務所の三瓶アシスタント・ディレクターが、それぞれの経験に基づいて、日瑞の交流の現状、日瑞の文化の違いやその対処方策等について、時にはユーモアを交えて講演して下さいました。

その後、それぞれの国民性の違いといったことから、 日本からスウェーデンへの交流を増やす方策まで、ス

ピーカーに対する質問の みならず、スピーカー、 同窓会員、一般参加者を 含めて活発に話合われま した。

本同窓会が、同窓会内部のみならず外部とも関わりをもちながら、活動を益々活性化していくように支援をして、結果として、日瑞の文化交流の促進、フェローシップ事業の推進にもつなげていければと考えております。(大月)



Edvard Fleetwood 氏(瑞日基金) による講演の様子

2.ニュース&トピックス

テルベリー・フォーラム



ワークショップが多数開催された Green Hotel

7月29日から8月3日まで、60 を超える世界中の国から約450人の 指導者が、ストックホルムから北に車 で3時間半のところにある人口217 人の村テルベリーに集まり、「How on Earth Can We Live Together?」をメイン テーマに、テルベリー・フォーラムが 開催されました。

本フォーラムは、今年で25回目を迎えましたが、60~70人の参加者が、

2日間非公開でワークショップで議論を繰り重ねてきた昨年までとは大きく異なり、上記のように規模を大きくするとともに、参加者全員が参加するセッションについてはマスメディアに対してオープンにされるなど、従来とは異なった形式の下で行われました。

しかしながら、本フォーラムと他の国際会議とを区別する、事前に明確な協議事項を定めず、最終的な合意文書を作成しないという特徴のほか、政界、学界、実業界、市民社会、教育界など異なるバックグラウンドをもった指導者が、国境、世代、背景を超えて自由な服装で議論し、参加者それぞれが自らのプログラムを作るというテルベリー・フォラームの伝統は維持されておりました。

ワークショップなど少人数の会合では、世界の指導的な立場にある方々が、 シリアン湖半の伝統的なスウェーデンの建物で、肩肘張らずに少人数で議論す る一方、全体会議では、カロリンスカ研究所の教授が、世界における貧困と健康の関係について、聴衆を惹きつけるプレゼンをしたり、米国の外交政策に対する批判的な発言が目立つ政治的なものまで、フォーラムの内容は多岐に渡っておりました。

なお、日本から招待された尾身幸次元科学技術 担当大臣は、ワークショップにおいて、科学技術 の振興には国民の理解が不可欠である旨発言され るなど、精力的にフォーラムに参加されていまし た。(大月)



Green Hotel でのワークショップの ひとこま

2005年ノーベル賞発表

10月3日の生理学・医学賞の発表を皮切りに、2週間に渡ってノーベル賞各賞の発表がありました。各賞の詳細については以下のとおりとなります。

発表日	賞名	受賞者(敬称略)	受賞者所属国名
10月3日	生理学・医学賞	Barry J.Marshall	Australia
		J.Robin Warren	Australia
10月4日	物理学賞	Roy J.Glauber	U.S.A
		John L.Hall	U.S.A
		Theodor W.Hänsch	Germany
10月5日	化学賞	Yves Chauvin	France
		Robert H.Grubbs	U.S.A
		Richard R.Schrock	U.S.A
10月7日	平和賞	International Atomic Energy Agency	(IAEA)
		Mohamed El-Baradei	Egypt
10月10日	経済学賞	Robert J.Aumann	Israel
		Thomas C.Schelling	U.S.A
10月13日	文学賞	Harold Pinter	U.K



物理、科学、経済学賞発表会場 王立科学アカデミー(KVA)

ノーベル賞は毎年平和賞を除いてストックホルムにて発表されます(平和賞についてはオスロ(ノルウェー)にて発表)。ノーベル賞という世界で最も著名な賞の発表を傍聴する機会を得、その賞の名の重さと同様、発表も重々な発表り行われると思いきや、非常にユニークな発表所究の説明において、素人にもわかりをすいようにパフォーマンス(今回は選考委員がダンスによる説明を行った)を行うなど・が取られたりと、非常に和やかな雰囲気のもと発表

が進みました。

日本においてはその著名度などで、発表の時期になるとマスコミなどをはじめ受賞の行方に各方面で加熱しますが、発表の場はむしろ淡々としており、特に生理学・医学賞の発表においてはカロリンスカ研究所内で行われたこともあ

って、熱心にメモを取る若手研究者や学生の姿が目立ちました。ノーベル賞の 発表の場であっても研究者にとっては「研究」の延長であることを実感する機 会でもありました。(藤井)



医学・生理学賞発表会場 (カロリンスカ 研究所)。若手研究者の姿が目立つ。



化学賞受賞研究説明の様子

スウェーデンの科学技術において最も影響力のある50人

スウェーデンの科学技術雑誌「Ny Teknik」は、11月23日に、同国の科学技術において最も影響力のある50人を発表しました。

第1位は、The TImes の本年10月の世界大学ランキングで、生物医学分野で世界第4位にランクされたカロリンスカ研究所のヘンリクソン学長が、「Bio Queen」として、選ばれました。

第2位は、スウェーデン最大のファンディングエージェンシーである、リサーチ・カウンシルの事務総長であるオムリング教授が選ばれました。

その他、当センター、日本と関わりが深い方々としては、第5位にパグロツキー教育科学文化大臣、第8位に VINNOVA のエリクソン事務総長、第9位にフルードゥストラーム王立工科大学長がトップ10に入りました。

第9位のフルードゥストラーム学長は、少なくともヨーロッパを先導する工科大学の1つとなることを目標に、王立工科大学を再編成して、中国においては、カロリンスカ大学のヘンリクソン学長及び第14位にランクされたシャルマーシュ工科大学のスンドグレン学長と連携をしていると紹介されています。

この報告は、潜在能力のみならず、名声、現在の状況、政治力、成果、世論への影響力を基に判定しておりますが、故人としては唯一、しかも、第6位にアルフレッド・ノーベルがランクされており、この国におけるノーベル賞の大きさを物語っています。

その他のランキング対象者等について以下のサイトを参考にして下さい。 http://www.nyteknik.se/art/43409 (大月)

アイスランド

当センターは、スウェーデンのみならず、他の北欧諸国、バルト三国をも活動範囲にしており、今回は、アイスランドについて紹介します。

アイスランドは、日本では、「世界最北の国」、「火山と氷の国」と紹介されることが多いですが、国連開発計画(UNDP)が9月7日に発表した2005年の「人間開発指数」(1人当たりの国民総生産、平均寿命、識字率と就学率に基づいてか各国の豊かさを図る指標)でノルウェーに次いで世界2位(日本は同12位)、世界経済フォーラムが9月28日に発表した「世界競争

力報告」で世界7位(日本は同12位)に入るなど、他の北欧諸国同様、世界 有数の「豊かな」国でもあります。

具体的な特徴としては、地熱、水力といった再生可能なエネルギーの利用が盛んで、その地熱を利用した温水をパイプで流し室内を温暖に保つなどクリーンかつ、インターネットユーザー率が世界有数であるなど先進的な国であります。さらに、日本に流通しているししゃもや甘エビの多くがアイスランド産であるなど水産業が盛んなほか、安価で豊富な発電量をアルミの精錬などに活用して、付加価値をつけて輸出しています。

学術・科学技術については、首相、教育科学文化大臣等がメンバーである内閣直属である科学技術政策会議(STPC)が基本的な政策を決定することになっており、2003年12月に承認された現在の政策においては、競争的資金を増やすこと、高等教育における学術研究を強化することなどが柱となっております。

特に、人口が少ない(2004年12月:29万4千人)ことや地理的な条件から移民との交わりが少ないなど家系の透明性が高いことを利用して、遺伝子情報のデーターベース化が進められており、特に Decode Genetics 社の研究は世界の注目を集めています。

また、2001年2月に在アイスランド日本大使館が開設されたほか、2003年10月には、アイスランド唯一で博士課程の学位を授与するアイスランド大学に、日本コースが開設され、既に日本へ留学した生徒も複数いるなどレベルも高く、今後の日本とアイスランドの交流の一翼を担ってくれると期待されます。

なお、アイスランド人は、北欧諸国の中でも特に英語が上手であると言われているほか、その国民性として日本人がよく感じることは、世界有数の親日国

であるうえ、目標が明確に決まれば短 期間で困難な仕事やり遂げるというこ とです。

レイキャビックで行われた、かの有名な米ソ首脳会談は、会談のわずか2週間前に、アイスランドに話が持ち込まれたが、それを見事にセッティングしたとのことです。(大月)

(在アイスランド日本大使館、アイス ランド教育科学文化省の話、外務省 のホームページを参考)



アイスランド大学で日本語を学ぶ学生

第三回日瑞ワークショップ「電子機能性有機物質の先端分光 Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications 』(ASOMEA-III)

今回センター便りにご寄稿いただいた関一彦先生(名古屋大学物質科学国際センター教授)は、私が名古屋大学理学部分子生物学科に奉職時からの知己です。先生は第一回日瑞科学セミナーが2001年6月にGlumsloevで開催された折に来瑞されてJSPSストックホルムオフィスの開所式にもお立ち会い下さっ

たとのことです。こんな次第で当オフィスの活動には引き続き関心を持たれて おりストックホルムセンター便りをいつもお読み頂いているとのことでした。

日瑞科学セミナーは二年毎に日瑞両国で開催されており、第二回は日本の湘南村で開催され、今回 Vadstena で第三回セミナーが開催されました。こんなご縁で私もご招待頂き、日瑞研究者の交流を目の当たりにしました。(岡崎)

(以下、ご寄稿記事です)

標記会議が平成17年6月1-5日に、南スウェーデンのバドステナ(Vadstena)で開催されました。この会議は、日本とスウェーデンの双方で、有機エレクトロニクスなどの電子機能性有機物質の分野と、シンクロトロン放射光を用いた先端的分光学との境界領域の研究が盛んなことから、この分野での交流と協力をめざして2001年より2年に一度開催されているものです。スウェーデン側ではスウェーデン戦略基金のプロジェクト「先端分子性物質センター(Center for Advanced Molecular Materials (CAMM))が中心となり、日本側では名古屋大学物質科学国際研究センターが事務局となっています。第一回は日本側からは日本学術振興会の支援をうけ、「第二回日瑞科学セミナー」としてスウェーデンのグルムスレフ(Glumsloev)で開催され、日本側参加者のうち5名は日本学術振興会ストックホルム研究連絡センターの開所行事にも参加しました。第二回は日本の湘南国際村で開かれ、今回が第三回です。今回は導電性高分子の電子構造解析で著名な W. R. サラネク教授(リンシェーピン大学)が組織責任者となり、45名の参加者が集まりました。日本からは大学院生などの若手も含めて18名が参加しました。

会場のバドステナは、スウェーデン第二の湖である Vaettern 湖のほとりにあ り、13世紀からの建物が多く残る素晴らしい所です。この会議では日瑞両国の 一線研究者の他に、世界から優れた研究者を招くのが伝統となっており、第一 回は A. ヒーガー教授(2000年ノーベル化学賞受賞)、第二回は井口洋夫博士 (文化勲章受章者)などが特別講演をされています。今回は R.フレンド教授 (ケンブリッジ大)、N. モルテンソン教授(ルンド大学放射光施設 MAX-LAB 施設長)、W. エバーハルト教授(ドイツ放射光施設 BESSY II 施設長)が招待 講演を行われました。今回はこの他に、特別ゲストとして、日本の大塚清一郎 駐スウェーデン大使御夫妻、M. ヴァールクヴィスト前駐日本スウェーデン大使、 岡崎恒子日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター長にも御参加頂くこ とができました。ヴァールクヴィスト前大使はヴァドステナの歴史について印 象深い講演をされ、大塚大使は、日本―スウェーデン間の科学技術交流の重要 性を強調する講演を行われました。また、岡崎センター長は、学振ストックホ ルム研究連絡センターの活動を紹介されました。これらの方々が参加されたタ 食会では、大塚大使が「歌う大使」として活躍され、日瑞双方の合唱の交換な どで、大いに盛り上がりました。

会議では28件の口頭発表と18件のポスター発表が行われ、日瑞双方から発表された高度な研究成果について活発な討論が行われました。また、会議終了翌日の6月5日には、日本人参加者がリンシェーピン大学ノルシェーピン校の有機エレクトロニクス研究センターを訪れ、電子ペーパーなどのデバイス作成

の工程を見学し、実用にも結びついたスウェーデンでの有機エレクトロニクス への取組について学びました。

会議の期間中には、参加者の間で今後の共同研究プロジェクトの可能性も話し合われました。既にこの会議の直接的な成果として、日瑞研究者の共同研究や若手の往来が行われており、今回も会議終了後、大学院生を含む3名の若手日本人研究者が、上記放射光施設 MAX-LAB でスウェーデン側研究者と共同実験を行っています。二年後には日本での開催を予定しており、本会議をもとに、若い世代を含めた日瑞両国の交流と協力がさらに推進されると期待されます。

名古屋大学物質科学国際研究センター 関 一彦 リンシェーピン大学物理学科 W. R. Salaneck



The 3rd Workshop on Advanced Spectroscopy of Organic Materials for Electronic Applications
June 2-5, 2005 Vadstena Sweden

上: 会場のホテルの前で

主な日本側出席者:関一彦(名古屋大学物質科学国際研究センター教授)、上野信雄(千葉大学工学部教授)、田中健一郎(広島大学理学研究科教授)、佐藤直樹(京都大学化学研究所教授)、藤川高志(千葉大学理学研究科教授)、石井久夫(東北大学電気通信研究所助教授)、島田敏宏(東京大学理学研究科助教授)、吉信淳(東京大学物性研究所助教授)、大内幸雄(名古屋大学理学研究科助教授)、平本昌宏(大阪大学工学研究科助教授)、森川良忠(大阪大学産業科学研究所助教授)

【編集後記】

7月より大月光康事務官が就任し、また 9月1日より新オフィスでのスタートを切り ました。

そして、早くも12月に入り、町を歩くと 至る所でクリスマスキャンドルの明かりが窓 辺で揺れる、そんな季節になりました。

北欧の冬は日照時間も短く天気が悪い、その上寒い。という前評判を聞いていたのですが、今年は例年に比べて非常に好天気に恵まれています。(百年に一度の好天気なのだそうです)。現地に長く住む方からは「これが



ストックホルムセンター新メンバー 左から大月事務官、岡崎所長、Hanna Lönn 藤井研修生。

ストックホルムの気候だと思わないで!もっと厳しいのよ!」などという声もちらほら聞きますが、好天気に恵まれたのを幸いと、快適なストックホルムライフを送っております。

9月からの3ヶ月間、オフィスの移転(新オフィスは前オフィス同様カロリンスカ研究所内)、GO ASIA を皮切りに非常に行事が多かったのですが、皆様のご協力のもと滞りなく終えることが出来ました。



年が開けると、1月に同窓会総会、2月にコロキウムとまだまだするべきことは尽きませんが、日瑞の更なる研究者交流の発展の為に当センターも尽力していく所存です。

来年もよろしくお願い致します。 そして良いお年をお迎え下さい。 (藤井)

9月1日より Retzius väg に移転した 新オフィス外観

Edit

監 修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センター長 E-mail:t-okazaki@jsps-sto.com) 編集長: 大月光康 (ストックホルム研究連絡センター事務官 E-mail:m-otsuki@jsps-sto.com)

編集担当: 藤井 貴子(研修生 E-mail :gakushin2@jsps-sto.com)

執 筆:岡崎恒子、大月光康、藤井 貴子

ご寄稿:関一彦先生(名古屋大学)

JSPS Stockholm office Retzius väg3, S-171-77 Stockholm, Sweden
TEL +46 Ø \$\mathbb{B}\$ 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 http://www.jsps-sto.com